

〈資料紹介〉「壬生地蔵縁起絵巻」注釈（四）

八 木 智 生

「壬生地蔵縁起絵巻」は、壬生寺（京都市中京区、律宗、本尊は延命地藏菩薩）に所蔵されている。本文はすでに、元興寺仏教民俗資料研究所編『壬生寺民俗資料緊急調査報告書 第三分冊』（壬生寺、一九七五年）に翻刻されているが、いくつかの誤りが認められる。そこで、あらためて原本を参照して翻刻と注釈を行うことにした。

本稿では、第六卷第一話と第六卷第五話を対象とする。

【凡例】

- 一、底本には、原本を用いた。
- 二、本注釈は、本文、語注、補注からなる。
- 三、本文は、底本を翻刻し、基本的にその通り表記した。ただし、通読の便宜のため、適宜次の操作を行った。

- ・ 任意の改行をほどこし、各段落の先頭は一字下げた。
 - ・ 旧字、異体字は通行の字体に改めた。
 - ・ 底本の細字、割注は（ ）で示した。
 - ・ 句読点、濁点を補った。
 - ・ 明らかに錯簡と思われる部分には、〈錯簡〉と表記した。
 - ・ 絵は〈絵〉と示した。
 - ・ 貼紙は〈貼紙〉と記し、内容を枠内に示した。
- 四、語注には、本文中に「*」を付した語句について、それぞれ記述した。難解な語句や固有名詞などを解説している。
 - 五、補注では、語注では解説しきれなかった、主にその段全体にかかわる問題について、さらに考察を加えている。
 - 六、各話の最後に、版本『壬生寺縁起』（元禄十五年序）の該当話を記した。なお、版本の説話標題は版本巻頭の目録による。

七、注釈にあたって、多くの文献・論文・辞書から教示を得たが、紙幅の都合上省略した。

第六卷

一 当寺鎮守六所大明神事 正元々年

【本文】

夫鎮守権現六所大明神は、其濫觴を尋奉れば、*天神七代地神五代より始り、又王法もこれより伝る。然則、神明の本地ははかり難し。遠く*月氏の経論にも出ず。近く漢家の典籍にも載せず。また*天仙化人の説をもきかず。*三藏諸師の口決にも伝ず。唯我朝の風俗として人倫あひつたへ、世こぞりて信奉る。或は託宣の文に依て*大権の垂迹をしり、或は夢想の告を以て*和光の本地をあふぐ者なり。

いま鎮守権現の事、以往の儀は*十禪師一社を以て根本の鎮守とす。是併本地と垂迹と相並て*応作を施しおはします。*内証をあらはし給ふ*山王上七社の中の第六の宮は十禪師権現、本地六道能化の地藏菩薩なり。迷の前には神と現じ、悟の前には仏とあらはれ給へり。迷の衆生を誘て*安養界にいたらしめむ方便なり。

吾朝の*聖徳太子は救世観音の変作として*再生利物の慈悲に安

住して、かりに日域に生をうけ給ふ。されば日本六十余州十万人の諸神、まち／＼にかわりましますといへども、*後得大悲の門に出させ給ゆへに皆是観世音なり。いわゆる聖徳太子の利生方便なるべし。三世十方の仏菩薩の慈悲をば観音一菩薩の領受し給へり。*三世諸仏大慈悲皆集一体観世音と説てこの意なり。元より*大悲闡提の中には、*地藏・観音をば同体異名にして、いづれも勝劣なしといへども、大悲利生の至極者たる是地藏の御慈悲なり。凡国土冥界日月星宿等は皆観自在の化作にして、地藏薩埵の変化なるをや。*笠置上人、春日社に参籠して諸神の本地を祈申されし時、大明神の御示現に四句の文を御託宣ありき。*本体観世音、常在補陀落、為度衆生故、示現大明神と上人にしめし給へり。天照大神も十一面観音なり。*内外両宮の時は金胎両部也といへども、その大日の御慈悲は観音なり。

いま当寺鎮守を六所権現と申は、*嘉禄年中に甲斐法橋*覚玄、別願として五所大明神を副勧請したてまつる。所謂八幡・熊野・稲荷・祇園・北野等の五社はなり。神主は大夫*中原広保に補らる。爰に*正元々年四月廿三日戌刻ばかりに、鎮守権現参社の小人に種々の御託宣あり。その神詞に云、鳥居／＼内瑞籬／＼辺／＼閑寂而、杜壇宝前御神楽／＼風流等希有也、何況於法施哉と少人に託たまふあひだ、一寺の衆僧評議をなして当神主図書権／＼助*中原朝臣榮定ならびに

諸堂の預等に課て、毎年五月十三日を以て祭礼をなしたてまつる処なり。

【語注】

天神七代地神五代 『日本書紀』神代卷にある、天地開闢の時生まれた天上の七代の神々と、続いて日本を治めた五代の神々。

月氏 中国古代、游牧民族が中央アジアに大月氏国を建て、以降この地を本拠とする民族は月氏と呼ばれた。一世紀中頃に勃興したクシャーナ朝では仏教が栄えた。『四十二章経』序では、「大月支國」から経典を写し取ったという。

天仙化人 天界の仙人。『法華文句記』に、「佛及聲聞天仙化人。及華嚴中加諸菩薩。又有衆生器世。而皆以佛爲教主也。」とある。

三藏諸師 三藏（經藏・律藏・論藏）に通じた高僧。

大権 衆生を救うため、仮の姿として現れた仏・菩薩。『沙石集』

に、「我朝ハ神國トシテ大権アトヲ垂レ給フ。」とある。

和光 「和光同塵」の略。仏・菩薩が本来の威光をやわらげ、仮の姿をとって現れて衆生を救うこと。

十禪師 日吉山王七社権現の一つ。瓊々杵尊を権現とする。地藏菩薩の垂迹である。『桂川地蔵記』に、「所詮自天神七代而至地神第三代天津彦火々瓊瓊杵尊。而天地畢竟十代也。受十代之禪給。故言十

禪之尊。今現円宗擁護之尊神給。日吉社十禪師是也。御本地者地藏菩薩也。」とある。

応作 仏・菩薩が衆生に応じた姿を現す、そのはたらき。内証 心のうちに仏教の真理を悟ること。

山王上七社 日吉大社の本社・撰社・末社の二十一社のうち、大宮・聖真子・二宮・八王子・客人・十禪師・三宮。

安養界 極楽浄土。

聖徳太子は救世観音の変作 『法華開示抄』に、「聖徳太子。是救世観音權化身也。」とある。聖徳太子を救世観音の化身とするのは、

『聖徳太子伝暦』にあるほか、多くの聖徳太子講式にみえる。

再生利物 「再生」は再びこの世に生まれてくること。「利物」は衆生に利益を与えること。

後得 悟った後に得られること。

三世諸仏大慈悲皆集一体観世音 『総持抄』に、「観音本地。観自在王如来也。観自在王如来者。阿彌陀言也。三世諸佛。大慈悲皆集一體。観世音極樂稱爲無量壽。娑婆示現施無畏観音、阿彌陀也。」

とある。

大悲闡提 大悲心をもって世のすべての人々を救おうとする菩薩。すべてを救いつくすことはできないため、ついに仏となることはできない。

地藏・観音をば同体異名にして『沙石集』に、「殊ニ地藏ハ彌陀・観音ト同體也。眞言ノ習ニ、台藏ノ曼荼羅ハ、大日一ノ身也。是ヲ支分曼荼羅ト云。一々ノ支分、一善知識トナリ、有縁ノ機ヲ引テ菩提ノ道ニ入。然ニ彌陀ハ大日ノ右肩、觀音臂、地藏ハ指也。」とある。笠置上人 貞慶。号は解脱房。一二五五〜一二二三。法相宗。藤原

貞憲の子。戒律に厳しく、旧仏教の改革を提唱した。

本体観世音、常在補陀落、為度衆生故、示現大明神 『本朝神仙伝』

泰澄に、「於稲荷社。数日念誦。夢有一女。出自帳中告云。本体観

世音。常在補陀落。為度衆生故。示現大明神。」とある。この文は

『梁塵秘抄』や、『麗氣記』にもある。典型的な神仏習合思想の表現といえよう。

内外両宮の時は金胎両部也 「内外両宮」は伊勢神宮の内宮と外宮。

「金胎両部」は金剛界と胎藏界。『溪嵐拾葉集』に、「内外宮、因果兩部曼荼羅、意也。」とある。

嘉禄年中 一二二五〜一二二七。

寛玄 不詳。

中原広保 『中右記』・『師守記』に外記として名がみえる。

正元々年 一二二五九。

中原朝臣栄定 不詳。

（版本・上巻第十話「当寺鎮守の事」）

一 当寺鐘鑄政平瑞夢并官有家師檀事 弘長二年

【本文】

願主左衛門尉*政平、*弘長二年閏七月十五日にいたりて、当寺堂前の大庭におひて*金鐘を鑄冶して樓閣に安置せらる。鑄物師

*土師宗貞をもて大工とす。

夫諸經に鐘を鳴す聞声の功德を説に、或は*当願衆生一聽鐘声、

脱三界苦得証菩提といひ、或は*可資身進道者、即是增長善法之具

〔善法之具とは所蓄の鐘なり〕といひ、或は*阿難升_ニ講堂_ニ擊_ニ鍵

椎_ヲ者、此_ハ是_レ如来信鼓也といふ。此等の仏語いづれも*出離*得

道の最要たり。經に*鍵椎者梵語なり。爰には翻して磬となづけ、

又は翻して鐘と号す。*律文に集僧の法を出すに七種あり。鍵椎そ

の随一也。*此鐘を鳴して十方の衆僧を召するに、聞ことを得てみ

な雲集して一切の仏事をなすに、受苦の衆生をして安樂の大利を得

せしむ。されば*付法藏伝の中に、*闍膩吒王大殺害をもての故に

死て千頭魚の中に入り、劍輪その全体をまどふ。身分を斫にしたが

つて、つひで又生すと云へり。羅漢ありて、僧の為に*維那して時

に依て鐘をならす。其こゑを聞に、劍輪すなはち空にありて苦受停

息す。かくのごときの因縁により、鐘をながく打に、利益広大也と

みえたり。*増一阿含には、*若シ打_ン鐘_ヲ時、一切ノ惡道諸_ノ苦並_ニ

得_テ停止_トト_ト説。此ノ意趣深甚なるをや。

金鼓を拍て敬白の信心を疑す事、殊勝なる者をや。

【語注】

政平 平政平。三重流平氏。正嘉元年、壬生寺の伽藍を復興する
(第五卷第二話)。

弘長二年 一二六二。

金鐘 金で作った鐘。

土師宗貞 奈良県の矢田寺(金剛山寺)の梵鐘(寛元四年(一二四六)に名がみえる。

当願衆生一聴鐘聲、脱三界苦得証菩提 しばしば鐘の銘にみられる文である。元禄十一年(一六九八)『浄土諸回向宝鑑(必夢)』には、

「聴鐘声功德文 出増一阿含經 一聴鐘声当願衆生脱三界苦速証菩提」とあるが、『増一阿含經』には確認できない。

可資身進道者、即是增長善法之具 『釋氏要覽』・『翻譯名義集』・『勅修百丈清規』に、「所蓄物。可資身進道者。即是增長善法之具」とある。いずれも『中阿含經』によるというが、不明。

阿難升講堂擊三鍵椎者、此は是如来信鼓也 『四分律刪繁補闕行事鈔』・『釋氏要覽』・『翻譯名義集』に、「阿難升講堂擊鍵椎者。

此是如来信鼓也。」とある。いずれも『増一阿含經』によるという。『増一阿含經』には、「是時尊者阿難聞此語已。歡喜踊躍不能自勝。

爰に惣伽藍造畢の後、*正元々年二月十九日に鐘鑄あるべきよし触催さる、処に、政平に本尊夢想の御告あり。六道能化、靈場精舎、有堂有塔、無鐘無樓、進_メ檀_ノ施_ノ力_ヲ、成_ニ米_際ノ縁_トあらたに示現を蒙る間、弘長二年閏七月十五日にいたるまで延引あり。万民の少施を軽しめず、薩埵の値遇を成ぜしむ。然間、*緇素貴賤集会して財宝をほどこし、道俗男女往来て金銀をなげうつ。其中に当寺の檀越官務*有家宿禰ことに志を抽て、探銅所に下知して十六斤六兩の赤銅を送て上野阿闍梨*覺慶に付らる。是によりて金鐘鑄冶の大願速に成就し、結縁の諸人、鐘をならして各隨喜の意を発せり。然則、無明長夜の眠をさまして、諸行無常のことわりをしり、法性覺月の暁に至て寂滅為樂のさとりをえん事、何ぞ是を疑はむや。

加之、*正嘉・正元の比、願主左衛門尉政平は官務有家宿禰に対して当伽藍の事相共に敬信ある上は、末代*師檀たるべきよし懇に申送らる、者也。しかるに山林田園等を寄付して、真俗*二諦の興隆を致さしめて現当二世の巨益を仰がる。來際をつくして檀那*進止の儀あるべからずと云々。是に依て寺院の修造*退転せず。僧侶踵をつるで*止住す。

就中、*正嘉元年五月廿九日に大工鑄物師宗貞に課て*金鼓_初一口を鑄あらはして宝前にかけて奉り、左金吾政平身づから三箇の逸韻を鳴して薩埵の尊聴をぞ驚す。おなじく参向の人々、貴賤を撰はず、

即昇講堂手執捷椎並作是説。我今擊此如來信鼓。諸有如來弟子衆者盡當普集。」とある。

出離 迷いの境地を離れ、悟ること。

得道 仏道修行によつて悟りを開くこと。

捷椎 打つて音を出し、時を知らせるものの総称。

律文 律の文章。『四文律』に、「當敷座當打捷椎。盡共集一處。」

とあり、相当するか。

此鐘を鳴してゝ安樂の大利を得せしむ 『四分律刪繁補闕行事鈔』・

『翻譯名義集』に、「我鳴此鐘者爲召十方僧衆。有得聞者並皆雲集共

同和利。又諸有惡趣受苦衆生令得停息。」とある。

付法蔵伝 『付法蔵因縁伝』。六卷。吉伽夜と曇曜の共訳。釈尊の付

嘱を受け、仏法を広めた人々の事績を記す。

罽膩吒王く苦受停息す 『四分律刪繁補闕行事鈔』に、「故付法蔵傳

中罽膩吒王以大殺害故。死入千頭魚中。劍輪繞身而轉隨斫隨生。若

聞鐘聲劍輪在空中。如是因縁遣信白令長打使我苦息。」とある。また、

『翻譯名義集』に、「付法蔵傳中。罽膩吒王以大殺害故。死入千頭魚

中。劍輪繞身而轉。隨斫隨生。羅漢爲僧維那。依時打鐘。若聞鐘聲

劍輪在空中。如是因縁遣信白令長打使我苦息。」とある。なお、『付法

蔵伝』には、「罽膩吒王貪虐無道。（中略）生大海中作千頭魚。劍輪

迴注斬截其首。續復尋生次第更斬。如是展轉乃至無量。須臾之間頭

滿大海。時有羅漢爲僧維那。王即白言。今此劍輪聞捷椎音即便停止。於其中間苦痛小息。」とある。

維那 法会に集僧を引導すること。

増一阿含 『増一阿含經』。初期仏教經典である四阿含經の一つ。

若シ打レシ鐘ヲ時、一切ノ惡道諸ノ苦並ニ得レ停止トナシ 『四分律刪繁補

闕行事鈔』・『翻譯名義集』・『佛祖統紀』に、「若打鐘時一切惡道諸

苦並得停止。」とある。『法苑珠林』・『諸經要集』にもみえる。いず

れも『増一阿含經』によるという。

正元々年 一二五九。

緇素 僧と俗人。

有家 小槻有家。？一二八〇。小槻氏壬生官務家は、晴富をはじ

めとして、壬生寺と関係が深い。近世前中期には、壬生寺住持は壬

生家の実子または猶子が就任する慣例であつた（京都大学総合博物

館蔵『壬生家文書』）。

覺慶 不詳。第六卷第五話に執行として名がみえる。

正嘉・正元の比 一二五七〜一二六〇。

師檀 師僧と檀那。寺僧と檀家。

二諦 世俗の真理である俗諦と、出世間の真理である真諦。

進止 土地や人を支配すること。檀那が寺を支配することのないよ

うに、の意か。

退転 修行で得た悟りを失い、後戻りすること。前よりも悪くなること。

止住 とどまり住むこと。

正嘉元年 一二五七。

金鼓 鰐口。壬生寺の大念仏に用いられたか。壬生寺所蔵の金鼓（昭和三七年七月の本堂火災で鎔融）の銘に、「地藏院奉鑄頭金鼓壹口正嘉元年丁巳五月廿九日鑄物師大工大和權守土師宗貞」とあった。

【補注】

本話では、『付法藏伝』や『増一阿含経』に経文があるとされる。しかし、本文と一致する部分が多いのは、それを引用している書、すなわち『四分律刪繁補闕行事鈔』（南山道宣（五九六～六六七）と、紹興十三年（一一四三）『翻譯名義集』（法雲）である。

『四分律刪繁補闕行事鈔』には、

我鳴此鐘者爲召十方僧衆。有得聞者並皆雲集共同和利。又諸有惡趣受苦衆生令得停息。故付法藏傳中罽膩吒王以大殺害故。死入千頭魚中。劍輪繞身而轉斫隨生。若聞鐘聲劍輪在空。如是因緣遣信白令長打使我苦息。即增一阿含云。若打鐘時一切惡道諸苦並得停止。此並因緣相召。

とある。『翻譯名義集』には、

（資料紹介）「壬生地蔵縁起絵巻」注釈（四）

我鳴此鐘者。爲召十方僧衆。有得聞者。並皆雲集。共同和利。

又諸惡趣受苦衆生。令得停息故。付法藏傳中。罽膩吒王以大殺

害故。死入千頭魚中。劍輪繞身而轉。隨斫隨生。羅漢爲僧維那。

依時打鐘。若聞鐘聲劍輪在空。知是因緣遣信白。令長打。使我

苦息。

とある。

両者に共通する文も多いが、前者がより本話と近い。とはいえず、「羅漢ありて、僧の為に維那して」は、『四分律刪繁補闕行事鈔』にはなく、『付法藏伝』に「時有羅漢爲僧維那。」とある（『翻譯名義集』では「羅漢爲僧維那。」）ため、参照している可能性がある。

（版本・上巻第九話「当寺撞鐘を鑄る事 付政平瑞夢の事」）

一 本願大僧都感夢事 付法陀羅山引導事

【本文】

爰に*本願大僧都は*竹馬の幼年より*鳩杖の頽齡に及まで、慈悲喜捨を以て心とし、柔和忍辱を以て行とす。されば*久習練行の学窓には*流を酌て源を尋ぬるに、法水是に依て久しく湛へ、*香を聞て根を討ずるに、仏樹これによていよく茂し。加之、*惣持*瑜伽の密場には、*五相成身の月千秋の光を耀し、*六大四曼の花万春の匂を薫ず。然則、弱冠の年より地藏菩薩を持尊として、行

住坐臥にも彼本誓を念じ、*造次顛沛にも悲願を忘れ給はず。殊に当寺の本尊に*親子霊夢を感じます事、これ度々に及べり。

其中に不思議第一なるは、地藏菩薩たゞちに快賢僧都を佉羅陀山中へ御引導あり。*昔釈迦大師、此山にして一万二千人の比丘衆、三万六千人の菩薩衆、一切の諸天および諸龍・夜叉・人非人等の衆、金輪銀輪の諸輪王等を十方より来集せしめて延命地藏経を説給へる儀式を御拝見ありとぞ。門弟の琳嚴禪師につぶさに御しめしあり。

それ佉羅陀山利益衆生の事、*経文にみえたり。今しばらく図画して信心をす、むべきもの也。されば*或経にいはいはく、絵にかきたるを見ても一たび三宝の境界を信ずれば、有漏の業をつくして無上の仏果をひらくととけり。誠にあさきたわぶれのふかき縁となる事は、絵にすぎたるはなし。この絵を御覧じて一念の信を催したまはむ人は、ゆ、しき地藏値遇のたよりのなるべし。たとへばいたづらに野沢の水を置ながら、草葉の露にやどる月影も、信心をす、むる光とこそみえ侍れ。そのゆへは、大善をいとなめども、信なくして心濁ぬれば、感応の光をへだつ。それひろき野沢の濁れる水の月をうかべざるにいたり。少善を修すれども、信をおこして心をすませば、利益の影をうく。秋草のしげみが下さゆり柴の露をもとめて月のやどるがごとし。おろかなる人の中にさとりざる事あり。仏神に祈るに、のぞむ所かなわざれば恨をなし、経論をよむに、もとむること

とげざれば疑をなす。是を邪見の人と申なり。かしこきはたゞ我信心のかしこき也。万善これより始る。つたなきも又我不信のつたなきなり。これ三宝の*偏頗にはあらず。されば釈教には*仏法大海信為能人と説き、儒教には*人無_レ信而不_レ立_レ、車_ハ無_レ軌而不_レ行と云り。内外の典籍にも、人は信あるべしとこそをしへ侍れ。

それ佉羅陀山は摩喝陀国の正中に伽耶といふ都あり。其より南の方十五里をすぎて此山はあり。高きこと九百四十丈、広さ七百二十丈也。*本願経にいはいはく、*地藏菩薩は十方世界に百千万億の身を現て、その一身ごとに人を、しへて三宝に帰せしめて仏になすといへり。又一切の日仙、この山に住す無数の菩薩もあつたりたまふととけり。七宝を以て山とす。佉羅提樹多く生たり。黄なる雲つねにそびく。是は六道の衆生の喜も歎もある時の気あつまりて黄なる雲となる。是によりて此山を黄雲山とは申也。地藏尊、黄色の雲を見給ひて、御身をあまたにわかつて遊化済度す。*経にいはいはく、慈悲あさき菩薩は浄土に住して衆生を接取す。慈悲ふかき菩薩は穢土に居して群生を利すといへり。*等覺*無垢の大聖、恒沙におはしませども、我等がために慈悲ことにふかきは地藏菩薩ひとりすぐれ給へり。されば釈迦如来も其悲願をかぐみて、我滅度の後、*弥勒出世の中間、造悪の衆生を引導しませとぞ附属し給ひし。地藏もあやぶむ事なくうけとり、力のよく済度にたへておはしますにこそ。

又弥陀の教法のたうときも、末法万年の、ちわづかに百年あるべし。

其後は再び聞事かたし。地藏の教法は五十六億七千万歳なれば、

*龍花のあかつきにつゞくべし。我等も其時まで出離せずば、地藏の外は能化なし。弥陀の浄土は十万億の国を隔てはるかなり。法羅陀山は中天竺の国のうちなれば、わづかに十万余里の外なり。即身にまいるともやすかるべし。我等に縁のふかくをはするにこそ。又弥陀如来は深重なれども、*接取の光明は念仏の者をのみ照す。もし我等がごとく*散乱放逸の人、信心の念仏は一遍もかたければ、無量光の接取にもる、事のかなしかるべきに、地藏菩薩、此山に住して*毎日辰朝に恒沙の定に入て十方を済度したまふ。我等が伏たるそばへも来り給らむ。されば散乱の称名も天耳の聞をおどろかし、不信の礼拝も仏眼さだめて照しましたまむ。たとひ念奉らずとも、まぼりたまふべし。まして一念も帰依供養せむ輩は、利益をうたがふことなかれ。

【語注】

本願大僧都 壬生寺開基快賢。

竹馬の幼年 竹馬で遊ぶような幼い年齢。

鳩杖の類齢 老年。「鳩杖」は握りに鳩の飾りがある杖で、宮中から老臣に与えられた。

〔資料紹介〕「壬生地蔵縁起絵巻」注釈(四)

久習練行 久しく修行を行うこと。

流を酌て根を討ずる 『摩訶止観』に、「然挹流尋源聞香討根。」

とある。真名本『曾我物語』に、「その源を尋ねれば、偏にこれ、かの仏は威神力の源を尋ねて流れを酌み、香を聞て根を討たんずる時は、豈称嘆を加へざらむや。」とある。

惣持 「陀羅尼」の訳。すべてのものをおさめ保つて忘れないこと。

瑜伽 瞑想によつて仏と一体になることをめざす修行法。または、真言密教のこと。

五相成身 密教で、行者が五段階の観行を修して仏身を得ること。

六大四曼 真言宗で、六大が万有の本体、四曼はそのすがたであるという関係を示したものの。

造次顛沛 わずかな時間のたとえ。

親子 まのあたり。

普釈迦大師く延命地藏経を説給へる儀式 『延命地藏菩薩経』に、

「一時佛。在法羅陀山。與大比丘衆萬二千人俱。菩薩三萬六千人俱。一切諸天及龍夜叉人非人等。金輪銀輪諸輪王等。從十方來。」とある。

經文 『延命地藏菩薩経』。

或経にはく無上の仏果をひらくととけり 『龍樹菩薩爲禪陀迦王説法要偈』・『往生要集』に、「若見圖書聞他言或隨經書自憶念」

とある。また『三宝絵』には「昔龍樹菩薩の禪陀迦王をおしへたる偈にははく、もし絵にかけるを見ても、人にはむを聞きても、或るは経と書とに随ひて、自づから悟り念へ」とある。

偏頗 かつよつていて不公平なこと。

仏法大海信為能入 『大智度論』をはじめ、多くの經典にみえる。
人無_レ信而不_レ立_セ 車_ハ無_レ軌軌不行 『念佛鏡』に、「又人無信而不立。車無軌軌不行。」とある。『妙法蓮華經玄贊』・『阿彌陀經通贊疏』に、「自古皆有死人無信不立。如大車無軌小車無軌。」とある。『論語』顔淵第十二に、「曰、去食。自古皆有死。民無信不立。」とあり、『論語』為政に、「子曰、人而無信、不知其可也。大車無軌、小車無軌、其何以行之哉。」とあるのが出典である。

本願経 『地藏菩薩本願経』。

地藏菩薩は十方世界にく_レ仏になすといへり 『地藏菩薩本願経』に、「每一世界化百千萬億身。每一身度百千萬億人。令歸敬三寶永離生死至涅槃樂但於佛法中所爲善事。」とある。

経にはく_レ群生を利すといへり 出典未詳。
等覚 菩薩の最高位。菩薩が修行を完成して正覚（眞の悟り）の仏と等しくなった位。

無垢 煩悩のないこと。または、等覚の位のこと。

弥勒出世の間 釈迦入滅から、弥勒が五十六億七千万年後に現れ

るまでの間、地藏菩薩が衆生を救済するという。

龍花のあかつき 龍華三会のこと。釈迦入滅から五十六億七千万年後、弥勒菩薩がこの世に出て龍花樹の下で悟りを開き、衆生済度のために開くという三回の説法の会座。

接取の光明は念仏の者をのみ照す 『観無量寿経』に「光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨。」とある。

散乱 心が乱れること。

毎日晨朝に恒沙の定に入て十方を済度したまふ 『地藏十輪経』に、「此善男子。於一日每晨朝時。爲欲成熟諸有情故。入苑伽河沙等諸定。從定起已遍於十方諸佛國土。」とある。『往生要集』に、「地藏菩薩。毎日晨朝入恒沙定。周遍法界拔苦衆生。」とある。

（版本・中巻第一話「本願僧都夢中に法羅陀山に至る事」）

一 同僧都夢中六地藏名号授給事 付六道能化功能事

【本文】

* 永承季中の比、本願大僧都禪室に入給ふ時、生身の地藏菩薩とおほしくて、六尊の能化たる六地藏尊の名号を具に御演説あり。これ則*黄泉嶮路のよそおひ、閻魔庁庭のくるしみ也。然に夢中の見相を御弟子中将阿闍梨性尊に御しめしあり。

夫六地藏の深秘は、*蓮華三昧経にとけり。すこしきもたがはず。

奇異の勝事、何ごとか是にしかむや。

先第一の檀陀地藏は地獄道の能化也。檀陀とは天竺の語、爰には人頭と翻せり。琰魔の庭に*人頭幢あり。罪人にむかひて忿怒の顔を現じ、口より鉄鎖を吐て罪人を縛り、先世の罪業を白状すること明鏡にして隠なし。其時彼白状に任て、琰魔王造惡の者を八寒八熱の奈利に落したまふ。罪人は自業自得の因果をば顧ず、たゞふかく人頭幢を恨が故に、地藏菩薩罪人の歎をかなしみ給ひて、人頭幢を摯て舌をまき口をとちて物をいわせず、彼白状を止たまへり。人頭すでにをしこめらる、うへは、八面の*淨頗利鏡も打破り、また*投量業の秤も折すて、獄卒をしりぞけ地獄の釜を破折して、罪人を取り出し*苦をぬき楽をあたふる事、偏に檀陀地藏の利生也。

第二に餓鬼道の能化たる宝手地藏は、手に如意宝珠をすべ給へり。夫餓鬼道の衆生は、先世の慳貪の罪により、五百歳を送りて飲食の名字をすら聞事なし。飢羸惺惶のあまり己が脛を碎ひて食ひ、身づからが子をとりては飢をやすめんとすれども、暫もなぐさまむ事なれば、地藏菩薩如意珠より餓鬼道の衆生のこのむところの種々の飲食をふらして、忽に飽足せしむるゆへに宝手地藏となづけ奉る。夫餓鬼道の苦患をぬひて法喜禪悅の楽を与る事は、宝手地藏の利生也。

第三に畜生道の能化たる宝印手地藏は、如意宝印の御手をのべて、

〔資料紹介〕「壬生地蔵縁起絵巻」注釈（四）

寸の虫は分の虫をのみ、尺の虫は寸の虫を食ふことを取得て、互殘食の苦をぬひて、*実相甘露の法味をあたへ給へり。凡畜生道は小より大にいたるまで、飲血を殘害する苦たへがたし。*金翅鳥はあさなく大海をあふぎほして一千の龍子を取噉ふ時、父母の大龍これをみて歎き悲む事、幾許哉。その報答に*難陀跋難陀龍王は須弥山を七匝に擲卷て尾をあげて山を叩ば、須弥頂の鉄樹に巢をかけて産をく金翅鳥の卵ども、ゆすられて落事、霰雨のごとくなるを、二龍口を開てその卵を吞に、父母の金翅鳥是を見て悲む事、いかばかりぞや。如此の苦患たへがたきを地藏菩薩如意宝印の御手をのべて畜類の苦をぬきたまふこと、偏に宝印手地藏の利生也。

第四に修羅道の能化たる持地々蔵は、それ修羅は地にすみ、帝釈は天に居す。されば天地の中あしくして、毎月の十六日の辰の一点には決定として合戦あるに、修羅は毎度軍にまけて引退て鬪諍の楯を大海の底にすつ。天にもし雷鳴ば天帝釈軍の鼓かと聞て、肝をけし魂をうしなふ。苦患云ばかりなし。此時持地々蔵、大地をたもち、*合戦道の城郭を警固し給ひ、安穩ならしめて鬪諍の苦をしりぞくる故に、持地々蔵とは申なり。されば彼菩薩を憑奉れば、かならず軍に勝ゆへに勝軍地藏と号す。是持地々蔵の悲願也。

第五に人道の能化たる除蓋障地藏は、人間の八苦の蓋障を除て故に此嘉名をたつ。夫*八苦は蓋のごとくに覆て、人間の楽をさゆれ

ども、地藏尊を信ずれば時日を廻さず、貧窮困苦の者に福德の樂をあたへ、乃至死苦の者には定業を転じて延命の樂を施給ひて、*臨終正念に住し、八苦の蓋障を退る事は、除蓋障地藏の利益也。

第六に天道の能化たる日光地藏の利生は、*天人五衰の闇を照し給ふ地藏なり。夫天人には五衰の禍雲たちぬれば、悲み来る事限なし。此時かならず死せんとす。しかりといへども、地藏尊を信ずれば、忌雲たちまちに晴て、日光地藏のめぐみを蒙る故に長寿天となれり。是日光地藏の済度也。夫地藏の真実の本地は、一代聖教の中に秘してあらはざる勝事なるをや。日光地藏と申は日天子なれば、本地観世音なり。又観音の本地は弥陀如来と号す。されば*秘経には*観自在王如来と説り。娑婆にしては観音と現じ、極樂にては弥陀*覚王の果徳を成じて、三世常恒に念仏の衆生を来迎し給へり。然則、弥陀・観音・地藏尊は同体異名の利生方便なり。弥陀如来は妙覚高貴の御姿にして、*下化衆生の形に相應せざれば観音と変ぜり。観音も猶声華に、首に宝冠をめして、身に璣珞をかざり、気高幽玄にましますば、*潦倒ぬる声聞の形たる地藏と成て、六道の底にしづみはて、浮べる期なき罪人を、毎日の晨朝に諸の地獄に遊化して受苦の衆生を救給へり。また*観音の弘誓のふかき事、海のごとくなるも、地藏の深重の慈悲には及ばずと云り。所以者何、いづれの菩薩か晨朝ごとに諸の地獄に入て罪人の苦にかわり給ふや。百

劫の中におひて無量数の菩薩に帰依せむよりは、一念の間も地藏菩薩を信ずる功德にしかずとみえたり。されば経には*一日称ニレバ地藏ト功徳大イナリ、名ヲ聞クモ勝レタリ俱胝劫ノ中ニ称ニルニハ余ノ智者徳ヲト説けり。それ大慈大悲の至極したるを地藏薩埵とは申也。

是地藏菩薩まのあたり本願大僧都に靈夢を感じしめ給ふによりて、此大事をしるせり。利生行願の不思議なる事は、如来無碍の弁説を以て無量億劫説給ふとも、宣つくすべからず。何況や凡夫の物を以て演申さむ事は、蚊虻の大海を吸ひ、螻蟻の須弥を動かさんがごとし。但、*経の中には地藏の功德無量百千万分にして、其一分を説き、又功德をのぶるに、一度も名号を唱へむ人は、巨益无量無辺なりといへり。

【語注】

永承季中 一〇四六―一〇五三。

黄泉嶮路 死後、地獄へ向かう険しい道のり。

蓮華三昧経 現在「蓮華三昧経」と呼ばれるのは、『妙法蓮華三昧秘密三摩耶経』であるが、地藏尊のことは触れられていない。『与願金剛地藏菩薩秘記』に、「六地藏尊ノ秘中ノ深秘、見ツリ於蓮華三昧経」とあり、本話における地獄と六地藏についての記述と同様の内容がある。

人頭幢 閻魔王の持物で、端に人間の頭をのせた杖。生前の善悪を判断する。

淨頗利鏡 閻魔王庁にあり、亡者の生前の善悪の所行を映し出す。

技量業の秤 業の秤。地獄で、亡者の生前の悪業の軽重をはかる。

苦をぬき柴をあたる 『延命地藏菩薩經』に、「抜苦与柴」とある。

実相甘露 「実相」は一切のものの真実の姿。「甘露」は三十三天の不死の靈液。苦悩を去り、長寿になり、死者をもよみがえらせるという。転じて、仏の教え・悟り。

金翅鳥 迦楼羅。仏法を護る八部衆の一。金翅鳥が龍を食らう様子は、種々の經典や、『宝物集』・『太平記』などにみえる。

難陀跋難陀龍王 難陀竜王と跋難陀竜王。ともに八大龍王の一。

合戦道 修羅道。訓読本『曾我物語』に、「弓箭に懸りて修羅の苦患を受け給ふらんと悲しきに、たまたま一人の子を法師になして、合戦道の苦をも助け奉らんと思へば」とある。

八苦 人間の八つの苦しみ。生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦。

臨終正念 臨終の際、心静かにして乱れないこと。

天人五衰 天人が死ぬときに現れる五種の徴候。教説により差異がある。

秘經 未詳。『与願金剛地藏菩薩秘記』の当該部分にも、「秘經_三阿

弥陀如来_ヲ名観自在如来_トとある。

観自在王如来 阿弥陀仏の別称。

覺王 仏を敬つていう語。

下化衆生 菩薩が衆生を教化・救済すること。

潦倒 態度や姿がおだやかで奥ゆかしいこと。

觀音の弘誓のふかき事、海のごとく 『法華經』に、「弘誓深如海。歴劫不思議。」とある。

一日称_{ニレバ}余ノ智者徳_ヲ 『大乘大集地藏十輪經』に、「一日稱地

藏 功德大名聞 勝俱胝劫中 稱餘智者徳」とあり、『往生要集』にも引用されている。

經の中には巨益无量無辺なりといへり 出典未詳。

【補注】

本話で説かれる六地藏の功德については、『与願金剛地藏菩薩秘記』（伝良助撰、写本は現存しない）にみえる。本書の成立時期について、真鍋広濟氏は享徳二年（一四五三）以前、応永年間という（『地藏菩薩の研究』三密堂書店、一九六〇年）。水上文雄氏は、上限を延文（永和）、下限を応永頃という（『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八年）。

以下に、元禄三年の跋文を持つ刊本である、京都大学附属図書館

蔵本の当該部分本文を翻刻して示す（一部を除き堅点は省略した）。なお、牧野和夫、杉山友美「与願金剛地藏菩薩秘記」―実践女子大学図書館山岸文庫蔵―（『実践国文学』四五、一九九四年三月）を参考にした。

我朝未レタ知ニ蓮華三昧経ノ六地藏深秘ノ本地ニ今可レ述レフ之ヲ蓮華三昧経ニ言ク第一地獄道ノ能化檀陀地藏トハ者檀陀ハ梵語此ニハ翻ス人頭ト人頭ハ琰魔ノ字ニ有リ人頭幢一人頭幢現ニメ忿怒ヲ口ヨリ吐ニ鉄鎖ヲ縛ニ執ス罪人ト前世ノ罪業白状明明ニメ無シ隠レ爾ノ時琰魔王任セ人頭幢ノ白状ニ執テ罪人ヲ随ニス八寒八熱一百三十六ノ泥犁ニ罪人不レ顧ミ口ニ罪業ヲ唯恨ニ人頭幢ヲ此ノ時地藏菩薩ノ悲願力ノ故ニ執テ人頭幢ヲ巻レ舌ヲ閉レ口ヲ不レ語ヲセ玉ハ而止ルヲ諸ノ白状ヲ名ニ檀陀地藏ト第二餓鬼道ノ能化宝珠地藏ハ手ニ居ニ如意宝珠ヲ所以ノ者何シ餓鬼道ノ衆生依テテ生前生慳貪ノ罪ニ経レト五百歳ノ無シ聞ク飲食ノ名字ヲ飢羸憊惶ノ之餘摧キ己カ腦ヲ散シ取テ自ノ子ヲ食メ欲ス息メシト飢ヲ暫モ無シ慰「於茲ニ地藏菩薩從ニリ如意宝珠ニ雨ニス餓鬼道ノ衆生ノ所レ好ム種種ノ飲食ニ飲メ之ヲ食メ之ヲ忽チ令ル飽足ニ如シ如意宝珠ノ第三畜生道ノ能化宝印地藏ハ伸テ如意宝印ノ手ヲ拔キ畜生道互相残害ノ苦ヲ各各ニ與ヘ微妙清淨ノ飲食ノ各各ニ含シム実相甘露ノ法味ノ金翅鳥兩ノ翅ノ中間三百六十万里金翅鳥朝朝ニ扇ヒテ于大海ヲ日日ニ噉ツ一千ノ龍子ヲ一時ニ父母大龍見レテ之ヲ嘆キ悲シムヤ然ルニ則難陀龍

王跋難陀龍王困ニ繞ル八万四千由旬ノ須弥山ヲ七重展ニテ頭ヲ於須弥ノ之頂ニ拳レテ尾ヲ扣レク山ヲ須弥山ノ頂鉄樹ノ之上ニ金翅所産ノ巢中ノ卵被ル、打チ落ニ如シ霰雨ニ此ノ時彼ノ大龍開テ口ヲ吞レ之ヲ父母ノ金翅看レテ之ヲ悲ミ鳴ク於茲ニ地藏展テ如意宝印ノ手ヲ拔キ苦ヲ與レテ樂ヲ偏ニ是レ宝印手地藏ノ利生ノ第四修羅道ノ能化持地地藏修羅ノ者栖レシ地ニ帝釈居レタ天ニ毎月十六日辰ノ一点ニ決定メ帝釈ト修羅ト合戦ス修羅毎度負テテ軍ニ引退ク鬪闘ノ楯落ツ大海ノ底ニ天若シ雷鳴ノ聞テ天帝釈ノ軍鼓ニ消レ肝ヲ失レテ魂ヲ苦患無量也是ノ時持地地藏持テ大地ヲ持テ修羅ニ警ニ固シ玉ヲ合戦道ノ城郭ヲ其ノ時阿修羅宮安穩ニメ脱ルレハ鬪闘ノ苦患ヲ名ニ持地地藏ト第五人道ノ能化除蓋障地藏トハ者除ニテ人間八苦ノ蓋障ヲ八苦トハ者（中略）如レ此ノ八苦ハ如ニニ蓋覆ノ障ニ人間ノ楽ニ当テ此ノ時ニ地藏薩埵貧窮困苦ノ者ニハ與ニニ福德ヲ愛別離苦ノ者ニハ生別死別共ニ與ニニ再会ノ楽ヲ怨憎会苦ノ者ニハ退レケ怨ヲ払テ敵ヲ與ニ安穩ノ楽ヲ五盛陰苦ノ者ニハ転ニニ五陰ノ苦ヲ與ニニ常住ノ楽ヲ生苦ノ者ニハ與ニニ平安誕産ノ之楽ヲ老苦ノ者ニハ與ニニ不老ノ樂ヲ病苦ノ者ニハ與ニニ無病ノ樂ヲ死苦ノ者ニハ転ニニ定業ヲ與ニニ延命ノ樂ヲ臨終正念ニハ與ニニ生スルノ淨土ニ樂上ヲ第六天道ノ能化日光地藏トハ者照ニニ玉ハリ天人五衰ノ闇ニ五衰ニ有ニリ小ノ五衰ニ有ニリ大ノ五衰ニ小ノ五衰トハ者（中略）信ニレハ地藏尊ヲ五衰ノ雲晴ヲ蒙リ日光地藏ノ恵ヲ生ニス長寿天ニ問フ地藏菩薩ノ真実ノ本地ヲ蓮華三昧経ニハ如何シカ説玉ヤ哉

答フ南方宝生仏ト是レ実義也雖レ爾リト六地藏ノ中天道ノ能化日光地藏日光地藏ハ日光天子日光天子ハ日天子也日天子ノ本地ハ觀世音觀世音ノ本地ハ阿弥陀如来也是以テ秘經ニ阿弥陀如来ヲ名ニ觀自在如来ト娑婆世界ニテハ成ニ觀自在菩薩ト極樂淨土ニテハ成ニ觀自在如来ト觀自在菩薩ハ成リ日光地藏ト日光地藏成リ六地藏ト六地藏ノ本地ハ觀音六觀音ノ本地ハ西方極樂阿弥陀如来ナリ当ニ知ル諸仏菩薩ハ大慈大悲ヲ爲レ玉テ體ト故ニ下リ下レルヲ爲レ貴ト阿弥陀如来妙覺ノ之體ニメ而下ニ化シ玉ハ衆生ニ其ノ形不ニ相應セ故ニ弥陀変メ成リ觀音ト首ニ戴キ玉冠ヲ身ニ莊テ瑠璃ヲ現シ声聞形ヲ濟玉ヲ六道ノ衆生ヲ

本文には多くの一致がある。本稿では『与願金剛地藏菩薩秘記』の性格等について詳述する余裕はないが、何らかの関係性があるろう。

(版本・中巻第二話「本願僧都六地藏の名号功德感聴の事」)

一 同僧都遷化事 永承六年十一月十六日

【本文】

しかるに本願大僧都一生の行業事おえて、*永承六年十一月十六日の夜半にのぞむで*遷化の別を告給へり。顕密練行の智者にてましませば、自身即仏の*開悟、此時にあらはれり。端坐合掌の相貌を見奉る道俗の貴賤は、互に大僧都をもつて地藏尊とあがめぬ者はなかりけり。

(資料紹介)「壬生地蔵縁起絵巻」注釈(四)

されば終焉の体たらく、西壁に*弥陀の三尊并に持尊の地藏菩薩を安置し、前後左右には遺弟の諸人おの／＼恋慕渴仰の思ひをこらせり。夫釈迦如来、*提河に潤をやめ、堅林に蔭を闇ふせし哀慟にことならず。然則、天より花ふり、音楽空中にきこえ、紫雲室にたなびく。是一期の間、地藏尊を或は空印し、或は摺写し、礼拝供養の行功を積たまふにや。臨終に、まのあたり小仏の地藏そのかずをしらず十方に涌现したまふとぞ。最後の御遺言不思議の勝事なり。

国土の人民競ひ来て瞻仰を至し、遠近の縑素手をこまぬひて感歎を催す。いま霜月中旬第六の天にあたりて、蓮台九品の教風にうつり給へり。それ老菊衰蘭のよそおひは秋霜を経てながくしほみ、金台宝蓮の迎は暁雲に伴てふた、び還らず。忽に*五々流転の境をはなれて、竟に*三々淨妙の台にうつり給ふ。悲哉、前途をいづれの所にかとぶらわむ。黄泉の路ほどとをし。後会だれか家にか期せむ。西刹の雲遙なり。芳言いまだわすれざるに、いたづらに竹窓の風を聞て腸をたち、温顔いづくにか去。むなしく苔径の月に対して心を傷しむ。計知ぬ、三密の檀前には久しく心月圓滿の相を覩じ、いま八葉の蓮上には定て*大日遍照の覚位を証給ふらん。夫地藏薩埵の加被護念なれば、現当の勝益いかでかあさかるべき。本願上人の行状、その梗概をしるす事かくのごとし。

仍、本願以来当寺代々の執行は、蓮華房広蔽、蓮間房勝蔽、蓮定

房覚後、甲斐法橋覚玄、大進阿闍梨興玄、玄覚房

（錯簡）

正音房阿闍梨永賢、若狭阿闍梨行実、少輔阿闍梨觀毫、備中法橋聖慶、上野阿闍梨覚慶、土佐阿闍梨尊珍、かくのごとき等の諸衆展転相統して、堂舎の興行退転なし。天長地久、国土太平の宝祚を祈り奉る所なり。

宝幢三昧寺縁起第六

【語注】

永承六年 一〇五一。

遷化 高僧が死ぬこと。

開悟 迷いを脱却し、真理を悟ること。

弥陀の三尊 阿弥陀仏を中心に、左に観音菩薩、右に勢至菩薩を脇士とする三体の称。

提河に潤をやめ、堅林に蔭を闇ふせし「提河」は「跋提河」の略で、古代インドの拘尸那揭羅国の川。「堅林」は沙羅林。いづれも釈尊入滅の場所。『四座講式』に、「不可説不可説三寶境界而言 夫自提河輟潤堅林暗影之後。」とあり、『大唐大慈恩寺三藏法師傳』に、「逮提河輟潤堅林晦影」とある。

五々流転の境 二十五有（衆生が輪廻する三界を二十五にわけたも

の）を流転すること。

三々浄妙の台 九品蓮台のこと。極楽浄土に往生するときに座る蓮の台。「浄妙」はこの上なく清浄なこと。

大日遍照の覚位 妙覚位（無上の悟りを得た位）のこと。「大日遍照」は大日如来、「覚位」は仏の位。『真如觀』に、「大日釈迦等の妙覚」とある。

（元）

（版本…中巻第三話「本願僧都示寂の事」）

〔付記〕 壬生寺長老松浦俊海師、壬生寺貫主松浦俊昭師には、格別のご配慮を賜りました。あつく御礼申し上げます。